平成24年度第9回大阪府文化振興会議　議事概要

◆日時：平成25年3月26日（火曜日）午後3時から4時

◆場所：さいかくホール（大阪府庁新別館北館1階）

◆議題：大阪府文化振興計画の策定について

大阪府市文化振興会議について

芸術文化振興補助金審査部会について

＜大阪府文化振興計画の策定について＞

​​​​​​​【事務局が資料1を説明】

【意見交換】

（委員）

文化振興会議の答申を踏まえ、基本的に第2次文化振興計画を継承・発展させて府がまとめたものが第3次文化振興計画。府議会での議論はどうか。

（事務局）

府議会では、アーツカウンシルが導入され、文化施策がどのように展開されるのか、府民の期待にどう応えていくのか、といった議論があった。

＜大阪府市文化振興会議について＞

【​​事務局が資料2を説明】

（委員）

先日のアーツカウンシルのシンポジウムは、全体的にバランスのいい企画であり、府市の新たな取組みとして全国に発信できたのでは。会場からも、アーツカウンシルに対する高い注目度を実感できた。

（委員）

タイトなスケジュールのもと、アーツカウンシルの議論が縦横無尽に拡がる中で、より良いものを築いていくためのスタート地点に立てたのではないか。今後、注目が集まる中で、大阪は、筋の通った文化行政に取り組んでいくことが重要ではないか。

（委員）

芸術、アートの役割と、それに対して公共がどのように支え、協働していけるのか、上手く発信していくことも重要ではないか。

（委員）

アーツカウンシル、文化振興会議の府市共同設置について、大阪市の議会の議論はどうか。

（事務局）

市会の議論としては、アーツカウンシルに府域の市町村が参画できるような仕組みにしてはどうか、段階的に市町村に呼びかけていくことも必要ではないか、という議論があったと聞いている。

＜大阪府芸術文化振興補助金審査部会について＞

【事務局が資料3を説明】

（委員）

先日の審査部会では、審査を通じて大阪の文化に貢献したいという意欲から、応募者へアドバイスなど、審査委員からフランクでアクティブな発言がみられた。

補助制度が、教育の目的か、文化推進なのか、審査において、どちらの観点から判断すべきか、また、応募者にも、補助制度の目的を的確にお知らせしておくことが必要ではないか。

応募者の間で、互いの取組みや考え方を共有し、交流や、協力を進めることができるよう、事業の報告会を年度末に行うと、ネットワーク化を図れ、全体的な大阪の文化の底上げにつながるのではないか。

審査部会の委員をはじめ、これまで大阪の文化に尽力されてきた方々が、今後もご協力いただけるよう、アーツカウンシルが導入された後の道筋を示すことが重要ではないか。

＜その他（府立上方演芸資料館のあり方について）＞

【​​​​​事務局が参考資料を説明】

（委員）

​​​​​​​ワッハ上方に蓄積された貴重な芸は、まさに生き物であり、忘れられることがないように、限られた予算であっても、新たな連携のもと十分に準備いただきたい。

＜おわりに＞

（委員）

新年度から、新たに、大阪府市の文化振興会議が立ち上がり、アーツカウンシルも設置される。時代を画する場に、われわれが臨んでいくことを改めて共有したい。

大阪府の文化政策のルーツについては、1979年設置の大阪府文化問題懇話会では、梅棹忠夫先生を座長に、司馬遼太郎先生、田辺聖子先生、小松左京先生、上田篤先生、末次摂子先生など、そうそうたる先生方で大阪の文化を議論されており、われわれは、その流れを受けていることをぜひとも認識いただきたい。梅棹先生は、懇話会の中で、文化に関して投資をせよという観点から提言をされ、それが、1989年に「大阪文化振興ビジョン」という形でまとめられた。そこには文化に関するいわゆるハコモノの建設も提案されているが、その後、実現しなかった構想もある。一方で建設された施設のなかには、現状、維持すら困難な状況に至っている施設もある。その後、府条例を制定、私たちは1次、2次、3次と振興計画を策定してきた。この間、伝統的な文化も継承しながらも、時代の変化を受けた新しい文化創造を重ねて、都市の力につなげていくには、大先輩方の思いを継承しながら、新しい施策について、専門家として意見を述べ、次の世代に受け継がれるよう努めていくべきではないか。府市文化振興会議では、大阪発のアーツカウンシルへの思いを共有しながら、未来に向けて文化振興のあり方を議論していくべきではないか。

―　以上　―